

佳作



83歳になっただいまでも、ものづくりへの「探求心」と「好奇心」は忘れない

吉田 ルミ子

大船渡市大船渡町の「おおふなと夢商店街」で、地域の交流や活性化を目指し、2021年から開催されているのが、地域住民が参加するフリーマーケット。

今まで10回ほど出店しているという、手作りの黒い帽子がトレードマークの大船渡町在住の葉内勲(はうちいさお)さん。葉内さんが販売するスペースには、昭和レトロなどこか懐かしさを感じる、鏡台や和ダンス、長火鉢、蓄音機などのミニチュアの作品が並べられています。

「ダンスの引き出しも一つ一つ開け閉めできるんだよ」と差し出した手は、83年の歴史が刻まれた大きな手。その手で作りあげられたミニチュア作品は、1ミリのずれや歪みがないものばかりです。妥協は許さず、一点一点きちんと製図におこし、丁寧かつ正確な作業で作品を作り続けています。

最初のきっかけは、親戚や近所の人からの頂き物へのお返しとして、作りはじめたことから。

「自分ができることと考えたとき、溶接屋だから小物を作ってプレゼントしようと思っではじめてみたの。とっても喜んでくれてね。それから趣味として、いろんなものづくりに挑戦しているよ」

葉内さんは、幼少期から物の仕組みに興味があり、歯車がついていたものを全て分解し、壊れた時計も自分で修理していたそうです。持って生まれた手先の器用さと、ものづくりへの探求心は、今でも衰えることはありません。

溶接屋として働いていたお父さんは、葉内さんが11歳の時に他界。4人兄弟の長男だったこともあり、葉内さんは家計を助けるため、中卒で市内の鉄工所に勤め、溶接の仕事を始めます。

「口は動かさず、手を動かせ!と言われて教えこまれてきたから、仕事は早いよ」と、少しはにかみながら話す葉内さんは、55年溶接屋一筋でその道を極めてきました。

コンマミリ単位でつなぎ合わせる溶接という仕事は、まさに職人の技です。仕事だけでなく、作品作りにおいてもより納得のいく形になるよう、材料探しから自分の目でしっかり見極めているそうです。

銅板、木材、ガラス、布などの様々な素材が、葉内さんの手にかかれば新たな物の価値として形作られるのです。

「作るのが好きだからね。やったことがないことも、『じゃあ、やってみようかな!』という好奇心が湧いてくるんだよ。その気持ちは、子どもの頃から今も変わっていないよ」
キレイに保管している製図には、細かな計算式と何度か加えられた修正の跡が残っています。難しい作品だと、試行錯誤をしながら何個か作っていくうちに、完璧といえる形になると葉内さんは話します。

「知りたい!」という探求心、「やってみよう!」という好奇心に、年齢は関係ないのだと。

「まちの歴史が知りたい」「気になるお店に行ってみよう」など、自分の気持ちをおしあげるものを、探っていききたいですね。

葉内さんが作るミニチュア作品に出会い、私の葉内さんへの探求心と好奇心を文章として形にしました。

葉内勲さんは、まさに私の推し人なのです。

※コラムの著作権は、すべて執筆者に帰属しています。無断での転載、使用はご遠慮ください。